

小学校英語を教える学生に必要な英語基礎の内容の考察 —英語の必要感の持たせ方とスキルアップの手立て—

Consideration of basic English contents necessary for students teaching elementary school English
—How to make students feel the need to learn English and improve students' English skills—

清水 和久 (人間科学部こども学科教授)

Kazuhisa SHIMIZU (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

小学校英語には、話す（やり取り、発表）、聞く、書く、読むの5つの評価項目がある。大学生は、これまで、読み書き中心の英語を学んできており、話す、聞くに関してのスキルは十分とは言えない、特に、即興的な英語を平易な言葉として発話することには慣れていない。英語基礎の授業では以下の5つに重点を置いて取り組んだ。1) フィリピンの大学生との交流経験。2) リテリングとパラフレーズ（日本の昔話を簡単な言葉で話すこと）絵本を通して、即興で簡単な英語で話せる英語力の獲得。3) シャドウイング（耳で聴きながら、同時に英語で聴いた言葉を繰り返す。4) 国際協働学習プロジェクトの疑似体験。5) 台湾の英語教育の重点。結果、1) 英語で話す体験の必要性を認識できた。2) 良く知っている物語を、自分の言葉で言い直すことでの英語力の向上の体感。3) ネイティブの英語のスピードに耳を慣らす必要性。4) 小学校での本ものの活動。5) 英語教育に関して先進的な外国の工夫を知る。の5つの必要性を感じる事ができた。

〈キーワード〉

国際交流体験、リテリング、シャドウイング、国際協働学習、台湾の英語教育

1 はじめに

小学校英語が、教科化され、大学の小学校教員養成課程でもそのための授業が始まって2年目を迎える。本学では、小学校英語にかかわる授業としては、2年次の「英語基礎」、3年次の「小学校英語科教育法」がある。3年次の「英語科教育法」は模擬授業が中心となるが、2年次の「英語基礎」では、英語の指導法の基礎と英語に関する専門的な知識が中心となる。この「英語基礎」の受講生におこなった英語の意識調査では、有効回答44人中、英語を得意とするものが1人、どちらかという得意14人、どちらかといえば不得意23人、不得意が6人であった。66%が不得意という結果であった。苦手意識を持った学生に、英語の必要感と英語のスキルアップの方法を伝えたいと思い、この研究に至った。

外国語の学習に限らず、他の人から強いられて学ぶより、自分から学びたいと感じた時の方が上手くいくことが多い。英語の学習に関してこの動機づけが大切であると考える。一般的に動機づけには内発的動機づけと外発的動

機づけがある。内発的動機づけ（統合的動機づけ）とは英語学習そのものに興味・関心を持ち、英語を使って英語話者とコミュニケーションを行いたいという欲求である。外発的動機づけ（道具的動機づけ）とは、外からの圧力によって動機づけられることで、報酬や試験・資格のために学習することを目標とする。例えば、英語のテスト勉強をする時に、成績が良かったら何らかの報酬が期待できる外発的な動機づけは短期的には有効であるが、結果が出るのに長期間要するものには、学ぶ内容に価値を見出し、何かのためではなくそれ自体を学ぶことが楽しく、満足感が得られる「内発的な動機づけ」によるものの方が効果が高い。⁽¹⁾

このことから学生には、「英語基礎」では「内発的な動機づけ」にあたる「新しい考えや知識を得ることの喜び、課題や学習を成し遂げた時の達成感、学ぶことによって得られる刺激」を持たせたいと考えた。同時に英語のスキルとして「聞く、話す」のスキルも身につけさせたいと考えた。将来小学生に英語を教えることになる学生自身には、

英語を使う楽しさを認識してもらい、同時に伴い英語のスキルアップも図る必要があると考えた。

そのためにはフィリピンの大学生とzoomでの交流を取り入れ、英語のスキルを高めるために「リテリング&パラフレイズ」と「シャドウイング」をおこなうこと、そして指導法の工夫として国際協働学習プロジェクトの体験シミュレーションを取り入れることとした。

2 研究の目的と方法

2-1 研究の目的

小学校英語を教える立場になる学生にとって、学習者自身が英語の楽しさと必要性を感じる授業、そして英語のスキルアップの手立てが分かる授業を提案し、その効果を明らかにする。

2-2 研究の方法

内発的な動議づけとして、実際に英語の必要性を感じてもらうために外国の大学生との小グループでの交流や、聞く話すのスキルをつける方法および、国際協働学習プロジェクトの模擬体験を試みることにした。以下の5つを具体的な取り組みとする。

- 1) ミンダナオ国際大学の学生との交流体験
自己紹介カードの交換、zoom会議体験
- 2) リテリングとパラフレイズ
日本の昔話を即興的に英語で話す方法。
- 3) シャドウイング
英語を耳で聴きながら、同時に聴いた言葉の発話
- 4) 国際協働学習プロジェクトの模擬体験
物を交換し滞在記をつけるプロジェクトの疑似体験
- 5) 小学校英語教育の先進的な教育方針を知る
2030年にバイリンガル国家を目指す台湾の教育方針以上5点を授業シラバスに組み込んだ授業を計画した。

表1 英語基礎の授業内容

第1回	英語での自己紹介カードづくり
第2回	第2言語取得の方法
第3回	ICTを活用した授業づくり
第4回	フィリピンの大学生の現状の講演
第5回	良い小学校英語教育のイメージとは？
第6回	英語での自己紹介動画作成
第7回	フィリピンの学生との小グループ討論
第8回	小学校英語の模擬授業を見て
第9回	昔話のリテリング
第10回	昔話即興リテリング
第11回	シャドウイング (ナス・デーリー)
第12回	母音の発音の口形
第13回	台湾の英語教育についてのzoom講演
第14回	国際協働学習プロジェクト体験
第15回	まとめ

3 研究の内容

3-1 フィリピンの大学生との交流体験 (zoom)

本講義の受講生に大学入学前に外国人と交流をした経験を聞いたところ、交流経験者は57%、全く経験がない学生が43%いた。そこで、当大学の協定校であるフィリピンのダバオ市のミンダナオ国際大学（以下MKDと記述）とのzoomでの交流を授業の期間中に取り入れた。MKDもcovid-19の影響を受けおり、授業は1年間ほどオンラインになっており、学生は自宅からzoomで授業を受けている。この交流の目的としては、学生自身に実際に英語で交流する体験をしてもらい、英語の必要性を感じてもらったことであつた。最終の小グループによるzoomの授業に向けて手順を追って準備を行った。

○第1回目の授業

オリエンテーションでフィリピンと交流することを告げ、写真入り自己紹介カードを英語で作成、MKDに送付。

○第4回目の授業

MKDの大学及び市内の様子をMKDの教員である町田氏（日本人）からzoomで説明を受けた。ダバオ市は日本と同様covid-19の影響を受け、ロックダウン中であり、人通りの少ない街並みを見せてくれた。

以下学生の感想例

「ミンダナオ国際大学はフィリピン日系人会が創設し、ダバオ市は180~200万人の人口であることを知った。日本語を教える時、初級では英語を喋って教え、上級になればなるほど日本語だけで喋って教えることを知った。また、日本語を喋れる生徒は漫画やアニメなど日本のものを使って学んでいるのだと感じました」

○第5回目の授業

MKDの大学生からの自己紹介化カードも届き、日本側は1対1のペアーでの交流を望んだが、相手からはグループ間の交流の方がやりやすいとのことで4つのグループ（日本人12名フィリピン人10名）に分け、それぞれグループリーダーを決め、そのグループリーダーを通して、まとめてメールを送付することにした。やり取りはグループ単位で2度でき、zoom会議に向けて期待感が高まった。

○第6回の授業

Zoom会議のためにさらに細かいグループに分け、全部で10の会話用のグループを作成。当日zoomのブレイクアウトで話すことを想定し、日本人同士で打合せをおこなった。また、当日の話す練習もかねて各自が自己紹介のビデオを作成した。またzoom用のグループで日本のクイズなどの企画を考えさせ、クイズなどの企画も考えた。

○第7回の授業

実際にzoomで小グループ会議を行った。フィリピンもロックダウン中であり、学生はそれぞれの自宅からアクセ

ス、全体でのあいさつの後、10個の小グループに分けて40分程度会話を行った。各グループ日本人4人に対して、MKDの学生が2、3人という配置であった。

あらかじめZoomのブレイクアウトのメンバーを伝えて各自に入ってもらった。学生にしてみれば相手の言っていることがわからなくても、教師は助けてはくれないので自分で何とか自力解決を図る必要がある。当日のzoomの感想を自由記述でとり、項目別に筆者の方で分類をおこなった。

表2 MKDとのZoom後の感想 (n=44 重複回答有)

○会議全般について	
身振り手振りで伝わる	8
相手の英語が分からない	4
リアクションや笑顔の重要性	3
思いが伝わるとうれしさ	2
積極的に話す姿勢が大事	2
○MKDの学生の印象について	
コミュニケーション力が高い	7
日本のことに詳しく日本語上手	6
英語が上手い	4
○考えたこと	
英語の勉強の必要性を感じた	14
直接話すことの楽しさを味わった	8

この協働学習のねらいは、生徒が英語を学び、それを外国人に使った時に、どのように感じるかを知ってほしかったためである。感想からは、相手の英語が早すぎてわからないという学生がいる反面、何とか意思が通じたことで自信を持った学生も多かった。またMKDの学生の話の進め方などからコミュニケーション力の高さを感じ、日本のことに大変詳しいのは日本語専攻の学生であったからであることがあとでわかった。この経験を通じて何より、英語の勉強の必要性を感じた学生が特に多かった。

以下3人の学生の感想を掲載する。かなりインパクトが強いことがわかる。

- 「MKDの学生は日本人よりもはるかに他の国の言語を多く勉強しており（週4時間）、意見を言うこと、交流することにとっても積極的であった。食べ物の他、コロナウイルスのことや地元のことなどいろんな話題を交流できると感じた。だから、今回の会話を通して、よりいっそう英語やコミュニケーションの力をつけてもっといろんな人と楽しく会話したいと思った。
- 「私の表情に「Nice smile!」というように反応をくれたので、リアクションは国境を越える大切なものだとさらに実感した。そこで、交流の中では、言葉でも表情でも、何か大きなリアクションが大事だとわかった。」

•「日本人同士では、I see.をなるほどと言う意味で使うときにはかなり違和感をもったが実際に使ってみると、相手も少し話しやすそうな雰囲気になり、ちゃんと伝わっていることが感じられた。またこのような機会を設けられることによって英語を学習したい意欲が沸いたとグループで話すこともでき、内発的動機付けを身をもって体験できた。」

この授業のあと英語の勉強の必要性についてアンケートをとった。必要性を感じた学生は97%に上った。しかし、実際に英語の勉強は始めた学生はその中の20%に過ぎなかったので具体的な勉強方法を示す必要があると筆者は感じた。

2-2 リテリングとパラフレイズ練習

英語の領域別目標の「話すこと」には、「やりとり」と「発表」がある。「発表」に関しては、事前に考えたことを暗記して話すことになるので、何度も練習することで上達するので取り組みやすい。しかし、「やりとり」は臨機応変な対応が必要となり、自分の言葉で表現する必要がある。この部分は学生にとっても苦手なところである。そこで、リテリング練習とパラフレイズ練習を取り入れることとした。リテリングとはキーワードや絵をヒントに、英文を再構成して「話す」活動である。これは対象の英文の内容をできるだけ正確に、自分の言葉で伝える活動である。またパラフレイズとは、やさしい英語に言い換えて説明することである。

今回は、だれでもその内容を知っている昔話「桃太郎」の絵本を題材とし、その絵本を見せながら自分なりの英語で説明することに取り組みさせた。

使用したサイトは「きつずちゅーぶ」・絵本読み聞かせ動画チャンネルで日本の昔話を絵とともに読み聞かせするサイトで、英語で読み聞かせをするサイトを選択した。⁽²⁾

話は全部で3分間ほどあるので、桃太郎が拾われて成長していく部分（5シーン）、祖母の元を離れて、いぬ、サル、キジの3匹を家来にする部分（4シーン）、鬼は島へ鬼退治に行く部分（5シーン）に分けて、学生が選択できるようにした。各シーンの絵をロイロノートスクール⁽³⁾に貼り付け、学生は絵に自分の英語の音声を録音すること。この場合、元の英語の音声はyoutubeにあるのでその英語の音声を聞き、あらすじを確認したうえで、即興で絵に合わせて英語で発話することになる。

元のYouTubeの英語の音声をもとに自分で要約する部分がリテリングの部分で、さらに簡単な英語にする部分がパラフレイズするものとなる。

授業当日は、各自のリテリングを4人1グループで生で聴きあうこととした。録音はあくまで練習で、その場で桃

太郎の1シーンごとの絵を提示しながら話をしていくのである。一方的に英語で発表するだけでなく、絵を指さしながら、相手の反応を見ながら話すことになる。

表3 授業のリテリング後の感想 (n=44)

事後の感想の選択肢	割合
とても難しかった	23%
どちらかといえば難しかった	69%
どちらかといえば難しくなかった	11%
簡単だった	0%

その代表的な感想をあげる

- 「今まで、文章を書いて読むということはよくしたことがあったが、即興で英語を話すことはあまりしたことがなかったので、つまりながらになってしまった。でも、会話や授業は常に即興なので、即興で話すことに慣れたと思った。」
- 「桃太郎のストーリーは小さい頃から絵本や動画を見てよく知っていたけど、それをいざ英語にすると単語や表現の仕方が分からなくて、即興で英語で話すのが難しかった。」

対面授業でリテリングする時に、事前に録画して練習をする課題を出してはいるが、それを覚えるのではなく、改めて、その絵を見ながら話す機会とした。やはり、即興で話を英語でリテリングすることは難しいようであった。しかし感想にもあるが、会話は常に即興であるので、リテリングやパラフレイズのスキルを今後ともつける必要があると考える。

2-3 シャドウイング

シャドウイングとは、耳で聞いた音声を、その場で後追いで、発声するものである。リスニングとスピーキングの両方を鍛えることができる。シャドウイングの効果としては英語的なイントネーションやアクセントが身につくといわれている。学生のスピーキングとリスニングのスキルを高めるためにおこなった。

今回は、シャドウイングの教材としては、英語の学習法について詳しく述べている中田敦彦氏が開設している「YouTube大学」⁽⁴⁾を参考にした。彼はここで、読み書きを中心とする従来の英語の学習法ではなく、聞く話すを中心とした学習法を勧めている。授業では、中田氏の考え方を紹介した後、シャドウイングの教材として推薦している「Nasdaily」⁽⁵⁾のサイトを活用した。このサイトは世界を旅するNas氏が、訪れた地域的话题を1分間程度の動画にしてYouTubeで公開しているものである。そのコンテンツには、貧富の差や、現地の人の特徴的な生き方の紹介など、興味を掻き立てるテーマが多い。学生には、そのコンテンツの

中から興味のあるものを選び、最低5回のシャドウイングをし、要求しその様子を録音したものを提出させた。

表4 シャドウイングの課題後の感想 (n=44)

事後の感想の選択肢	割合
とても難しかった	18%
どちらかといえば難しかった	43%
どちらかといえば難しくなかった	34%
簡単だった	5%

難しいと答える学生が半数を超えたが、リテリングと比べるとその割合は減っている。

表5 「Nasdaily」の内容についての興味 (n=44)

内容についての興味度の選択肢	割合
大変興味を持った	57%
どちらかというに興味を持った	43%

表6 「Nasdaily」の視聴回数と上達度 (n=44)

5回の繰り返し後の上達感	割合
うまくできるようになったと感じた	48%
どちらかというに上手にできるよう感じた	48%
どちらかというに上手にできなかった	4%

以下代表的な学生の感想である。

- 「最初は全然ついていけなかったが、回数を重ねるごとにについていけるようになり、5回目くらいで全文読めるようになった。大事な文は声を大きくするだけではなく、言葉をのばして発音すると大事なフレーズだと伝わるのだなと思った。」
- 「最初の印象は、早すぎて口が回らない感じでした。しかし真似して話しているうちに、自分は英語をしっかりと話せている気分になり楽しい感じでした。」
- 「わからない単語を調べて意味がわかったら動画がすごく面白く感じて、何度見てもあまり飽きなかった。」

以上の感想でもわかるように、1分間程度のシャドウイングでは、5回程度聞いて繰り返し発話練習をすれば、マネができるようになり、学生の自信に繋がっていることが分かった。また、マネするコンテンツ自体が大学生にとって興味をひくものであったこと、選択制にしたことも要因として大きいと考えられる。

2-4 国際協働学習プロジェクトの模擬体験

東京書籍の小学校英語の教科書「NEW HORIZON Elementary」では各学期の最後に実際に海外との交流を想定した単元が組まれている。6年生であれば、「外国人にメッセージを伝えよう」「世界と自分のつながりを紹介しよう」がこれに当たる。英語を実際に使う場面の想定は重要である。本講義では、iEARN⁽⁶⁾の日本支部JEARN⁽⁷⁾

が中心になって行っている「テディベアプロジェクト」の疑似体験を行った。このプロジェクトは海外の交流校に自分たちの代表としてテディベア（ぬいぐるみ）を送り、交流校からもテディベアが自校に留学してくる。やって来たテディベアを通して自国の生活や文化を紹介することができる。最終的にはテディベアを日記と一緒に交流校へ帰国させることになる。

授業での実施内容

①海外へ送り出すテディベアのデザインの作成

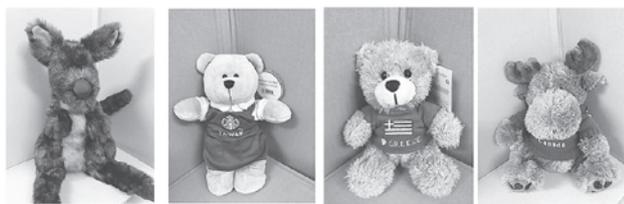
名前、性別、自己紹介の内容を決める。服は、自己紹介に合わせてロイロノートスクールのアプリで作成



図1 テディベアの実際のデザイン例

②海外からやって来たテディベアの滞在記の作成

それぞれ国籍の違うぬいぐるみから1体を選んで滞在記を作成する



オーストラリア 台湾 ギリシャ カナダ

図2 選択できる国籍の異なるぬいぐるみ

Butter

It's been two weeks since I came to Japan.
 Today, the school ended at 4 pm.
 I went to eat sushi with my friends after school.
 Sushi is a very popular food in Japan.
 I ate sushi for the first time.
 It was very delicious.
 I like tuna the most.
 I want to go again soon!



図3 台湾からのテディベアの仮想日本滞在記

日本での生活の滞在記を作成。今回は写真とぬいぐるみを合成した写真。ぬいぐるみの気持ちになって日記を記載する。

表7 テディベアの有効性の質問

この活動は英語の習得に有効だと思うか	割合
とても有効だと思う	93%
どちらかといえば有効だと思う	7%

表8 テディベアの活動への将来的意欲

この活動を現場で取り入れてみたいか?	割合
とても取り入れたい	86%
どちらかといえばとりいれたい	14%

学生にとって、小学校の英語教育の現場で使えるプロジェクトの疑似体験はインパクトがあったようである。図3の滞在記を書いた学生の感想を記載する。

・「私は、日本の食べ物の中で寿司が人気であるため外国の方は行きたいと思う場所の一つだと考えた。自分が他国について知るだけでなく、自分の国について紹介することで、自国の良いところを再発見する機会になり、自国を大切に作る気持ちも育むことができると感じた。またこのプロジェクトは、小学生にとっては感情移入しやすく、より関心が高まると考えられる。」

小学校には、GIGAスクール構想で1人1台の端末が入っており、英語で習ったことをもとにアウトプットとしてテディベアのデザインや、滞在記作成にも大いに活用できると思われる。

2-5 台湾の先進的な英語教育との比較

これまで学習者として英語の必要性を感じる体験、英語のスキルアップの方法、小学校で実施可能な国際交流の取り組みについて述べてきた。もう一つ別の視点として日本の小学校英語を考える上で外国の小学校英語との比較の観点も重視したい。近隣のアジア諸国は日本よりも早く小学校英語教育を始めており、台湾は日本の小学校英語の教科化より20年ほど早い、2001年より小学校で英語が必修化されている。

第13回の講義において、台湾の嘉義市のEnglish Academyのセンター長のSandra Cheng氏によるzoomでの講演を開催した。言語が英語での講演になったので学生には少しハードルが高かったが、あとで録画済の講演を見返すことも可能な設定とした。その講演によれば、台湾は2030年度にむけて、バイリンガル国家を目指しているとのことであった。バイリンガル国家とは、シンガポールのように日常的に英語を使う環境をつくることである。この「2030バイリンガル国家計画」政策は2018年に閣議決定されている。国民の英語力を高めるための具体的な政

策として公教育で2言語習得を奨励し、行政や民間サービスを2言語化することが検討されている。⁽⁸⁾嘉儀市は台湾の中でも特に英語教育に力を入れており、市内には公立のEnglish Academyが2つ設置されている。この施設は、体験型英語施設で市内の4、5年生を対象に年に2回活用できるカリキュラムになっている。筆者も過去に実際に訪問しており、韓国のEnglish villageには規模的に及ばないが、施設内で英語だけを使ってダンスや料理、買い物などの全12種類の活動ができるようになっている。日本で2018年9月に東京都教育委員会と民間業者がタイアップして有料の体験型英語施設「Tokyo Global gateway」が作られている。日常的に英語を使う場所がない国では、このような体験型英語施設は海外に行くことと同じ体験ができることから有益であると感じた。

Sandra Cheng氏のプレゼンからは、台湾の英語教育はCLIL(内容言語統合学習)とimmersion教育に力を入れていることがわかった。CLILとは英語の文法ルール等を教えることのみを目的とするのではなく、その扱う内容の習得にも目標を置いているものである。内容に興味を持てるものであれば、英語の文法ルールも自然と身につくことになる。これと似たようなものにimmersion教育がある。これは、体育や算数、図工などの教科の学習を英語のみで行うものである。一般的にはネイティブの先生が担当することが多く、台湾では、体育や図工などで取り入れられている。将来的には社会科での導入も考えられているようである。CLILとimmersion教育の違いはimmersion教育の方がCLILのよりも内容の取得を重視している点である。

CLILの考え方は日本でも最近取り上げられるようになった。小学校英語でいうと6年の教科書にeatを学ぶユニットがあるが、使う場面として、肉食動物が草食動物を食べるなど食物連鎖の関係性を学べるようになっており、カメがビニール袋を餌のクラゲと間違えて食べて死んでしまう話も入ってくる。これは環境問題を考えることにつながる。immersion教育は日本の公立の小学校での導入は難しいと思われるが、他教科でも教師の指示の中にclassroom Englishとして使うことによって英語をツール言語として

認識できるようになる。

1教師にとって他国の英語教育の方針は、日々の英語教育の実践にとっては関係ないかもしれないが、世界の英語教育の動向を知ることが、これからの方向性を考える上で大切である。

4 研究のまとめ

英語基礎の授業において必要なスキルとコンテンツの両面から活動をまとめてみると以下の表ようになる。

表9 授業で取りあげた英語のスキルとコンテンツ

主な項目	英語に必要なスキル	内容
MKDとの交流	○書く、話す、聞く ・異文化理解 ・学習者としての学び	MKDとの自己紹介のカード交換 Zoomでブレイクアウトでの会話 通じた喜び、英語の必要性の理解
リテリング パラフレーズ	○話す(発表) ・即興的に英語を話す力 ・より簡単な英語の表現力	決まった英文を覚えては話すのではなく、だれもが知っている桃太郎の話を見ながら、わかりやすいこと言葉で話す
シャドウイング	○聞く、話す ・リスニング ・スピーキング	決まったyoutube動画の音声聞きながらまねて話す。興味のあるコンテンツを選択できる
国際協働学習project	○書く、話す ベアーの自己紹介を考え、日本滞在記の音声録音	小学生が興味を持つプロジェクトICTを使いベアーのデザインや自己紹介を作成する。紹介の音声の録音
台湾の教育の方向性	なし	2030年にバイリンガル国家を目指す台湾の英語教育の内容を英語で聴く。 日本の英語教育の方向性が分かる

小学校教員を目指す学生を対象に、小学校英語教育に必要とされるスキルおよび、扱うコンテンツを分類整理した。外国の同世代の学生との交流体験では、異文化理解と英語学習の必要性を感じさせることができた。これは英語学習の必要性を感じるためには重要である。小学生が英語の必要性を感じさせるには、国際協働学習プロジェクトなどで、同世代とつながり、意思疎通できた自信を持たせることが重要である。また、それを指導する教員のスキルを上げるためにも、即興のリテリングとシャドウイングなどの練習が欠かせないと考える。

注

- (1) 外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か 白井恭弘 岩波新書2008
- (2) Momotaro-The Peach boys Japanese Fairy Tales in English
<https://www.youtube.com/watch?v=TESmBov1DWs>
- (3) https://loilonote.app/_/
- (4) <https://www.youtube.com/channel/UCFo4kqllbcQ4nV83WCyrai>
- (5) <https://www.youtube.com/channel/UCJsUvAqDzcyYv2UpFmu4PcA>
- (6) <https://www.learnonline.org/>

(7) <https://www.jearn.jp/>

(8) Tsai hoping English proficiency of Taiwanese can improve in 10 years

参考文献

- コア・カリキュラム準拠 小学校英語校育の基礎知識 村野井仁(編著) 大修館書店2018